

## エッセイ 中東奮闘記－湾岸50年、オイルマンの軌跡

### 第十九回 補記

遠藤晴男

(日本オマーンクラブ名誉会長)

これまで十八回に亘って、「中東奮闘記－湾岸50年、オイルマンの軌跡」を連載させていただいたが、各回の文字数をおよそ2万字としてきたので、いくつかの章で割愛せざるを得なかった話がある。それらをこの章で以下に補記する。

#### 19-1 ベイルート時代 - 1975年

##### (1) ファイサル国王崩御

1932年の建国以来1953年まで初代国王として在位したアブドゥルアジーズ・イブン・サウド以降、サウジアラビアでは現在まで彼の息子たちが王位を継承している。私がベイルートに駐在する10年ほど前の1964年1月に即位したのが、第三代国王のファイサル・ビン・アブドゥルアジーズである。

1975年3月25日の昼過ぎ、私は伊藤忠商事の藤野ベイルート支店長、石油担当の宮本、共同石油の白石所長と、ベイルートのゴルフ場にいた。プレー中に、ファイサル国王崩御の報を聞き、「たいへんなことが起きた。どうなるのだろう」と不安に駆られた。

というのも、ファイサル国王は、内政面ではのちの基本統治法（1992年制定）に受け継がれる基本政策を制定し、女学校の設立やテレビ放送開始などの近代化改革を進め、対外面では、1969年にイスラーム諸国会議機構（2011年に「イスラーム協力機構」に改称）を結成して事実上イスラーム諸国の盟主となり、1973年の第1次石油危機の時にOPECを主導し、輝きを放った国王であったからである。

そのファイサル国王が、クウェート代表团との会見中に甥のファイサル・ビン・ムサイド王子によってピストルで射殺されたのであった。国王の近代化政策に多くのサウジアラビア人が反対した中で、1966年にムサイド王子の兄のハーリド王子が放送を止めさせるためにテレビ局を襲撃するという事件を起こした。この時に、ファイサル国王が射殺命令を出し、ハーリド王子が殺害されたのを恨んでの犯行であった。

いま調べてみると、当日は火曜日。平日にゴルフ場にいただけではなく、その後で宮本邸で4人で麻雀もやった。もう時効だと思われるが、おおらかな海外駐在の日々であった。

ファイサル国王の崩御に関連してもう一つ思い出がある。

亡くなられて2日後の深夜に家族が日本からベイルートに到着し、その朝に次女の智子が発熱、当日クウェート石油省のアリ次官補と約束があった私が「貴男は冷たい人」と妻になじられながらも妻や娘たちの世話を初対面のニチメンの牧野に任せて出かけたことは、既述した。(第五回参照)

その後ホテルで面談したアリ次官補に、ファイサル国王の死を一面で報じた日本のある全国紙を見せたら、彼が急に笑い出し、「うちの皇太子がサウジアラビアの国王になっている。帰国したら、皇太子に話す。新聞貰える？」と言った。その新聞の一面に「新国王にハーリド皇太子(ファイサル国王の異母弟)」という見出しで掲載された写真が、サウジアラビアのハーリド皇太子のものではなく、クウェートのジャービル皇太子の写真だったのである。

アリ次官補は王族であり、この新聞がジャービル皇太子の手に渡ったのは間違いない。写真の取り違えというミスが起こったのは、湾岸の国が今以上に日本になじみが薄かったからだろう。

## (2) 公開処刑

私が石油を求めてアラビア半島を走り回っている頃、湾岸諸国では、木曜日と金曜日が休日であった。金曜日の集団礼拝の後に行われる公開処刑を見るために、私は、サウジアラビアへの出張を木曜日にしたことがあった。

翌日の金曜日、私はカメラを手に提げて、ホテルで公開処刑が行われると聞いたモスク脇の広場に向かった。空が真っ青に晴れ上がった暑い日だった。昼近くに広場に着くと、そこにはもう人垣が出来ていた。私は、小柄な身体を利して、人をかき分けながら前に進み、最前列では外国人なので流石に目立ち過ぎと2番目の列に立った。

やがて昼の礼拝が終わり、モスクから広場を目指して大勢の人が息を弾ませながらかけ寄ってきた。人垣が膨れ上がったところで、罪人たちを乗せた車から、手を縛られた罪人たちが次々と降ろされた。まじかに見る髭面のいかにも悪そうな罪人たちの顔は不気味だった。

次に、一人ずつ前に引き出されて、罪状と処刑宣告と思われるものが係官によって読み上げられた。中には、ふてぶてしく聞く者もいた。いよいよ処刑。その日に死刑はなく、すべてむち打ちの刑であった。罪人たちの裸の背中にむちで打たれ、赤く腫れあがる。それでも、薄笑いを浮かべている者もいた。

せっかくの機会だからと私が持っているカメラを構えようものなら、私がその場に引き出されて処刑されてしまうのは必定。私はカメラが見つからない様、固く握り締めた。現代で公開処刑を見ようとは、考えもしない体験であった。

日本で公開処刑が禁じられたのは、1873(明治6)年のことである。150年ほど前までは、日本でも公開処刑は当たり前のことであった。処刑があると人々は押すな押すなで刑場の竹矢来につめかけていたであろう。そんなに遠い昔のことではない。

### (3) 砂漠の天使、メアリー

ベイルート港近くの酒場。時計は夜中の2時を廻っている。10人近くが座れるカウンターと4人掛けのテーブルが数席の小さな店。私はアリと杯を傾けていた。居合わせたのは客数人と店のレバノン人のオーナーとボーイの2人。

アリはアブダビ国営石油会社のマネジャー。ベイルートに出て来て私に連絡をしてきた。「どこへ行こうか」ということになり、「以前アブダビのナイトクラブで働いていたメアリーに会おう」とこの店に来たのであった。

メアリーはイギリス人女性。アリは、アブダビでのおなじみさんである。「相変わらず綺麗だな」、「この遊び人さん そっちも変わらないわね」、「今夜は一緒に飲もうぜ」、「乾杯!」と盛り上がった。カウンター越しのメアリーのピッチも上がっていた

オーナーがメアリーのところに何回もきて、何事かを告げている。彼女は、無視。また、オーナーが近づいたと思ったら、メアリーが突然カウンターの上にあったウイスキー瓶を手で払い飛ばし、後ろの戸棚のウイスキー瓶までも取り出して床に投げつけ始めた。「ガチャン」、「バシッ」とウイスキー瓶が割れて飛び散った。

オーナーとボーイが止めに入ったが、酔いが回ったメアリーはカウンターの外に出て来て、カウンター上にまだ残っていたウイスキーやブランデーの瓶をさらに手で払い飛ばした。「こんな店、何よ!」と叫びながら荒れ狂った。「メアリー、止めろ!」とアリと私も止めに入ったが、手の施しようがない。割れた瓶がコロコロと床に転がった。

メアリーは、やがて床で大の字に伸びてしまった。瓶の破片で手が切れ、血が流れている。意識も失っているようで、「このまま死んでしまうのだろうか」と私は不安に駆られた。アリも首をすくめている。やがて、オーナーとボーイが、メアリーの手足を持って、外に運び出して行った。彼女には、後できついお仕置きがあった筈である。

あの夜、何が彼女をあんな風にさせたのか。あこぎなレバノン人オーナーに「少しは他の客にもサービスしろ」としつこく言われて爆発したのであろうか。久しぶりにアブダビからの懐かしい顔に会って人間らしい気持ちを取り戻しつつあった時に、現実に戻される命令に堪え切れなくなったのだろうか。

当時、アブダビには、石油省が入った建物の一階に「エーワン」というナイトクラブがあった。そこでは舞踊ショーが見られ、その踊り子たちがカウンターやテーブル席で男たちの相手をしていた。

「涙じゃないのよ浮気な雨に  
ちよっぴりこの頬濡らしただけさ  
ここは地の果てアルジェリヤ  
どうせカスバの夜に咲く  
酒場の女のうす情け」

(作詞：大高ひさを 作曲：久我山明 歌：エト邦枝 1955年)

と歌われたアルジェリアよりももっと辺境のアブダビでのうら悲しい夜のあだ花たち、メアリーもその中にいた。

「中東の中心地」のバイルートにも、さまざまな国の女たちが夜の世界で働いていた。レバノン、シリア、ギリシャ、イギリス、フランス、それにイエメン人女性までいた。湾岸国の砂漠の油田から頭に血を上らせてバイルートに出てくる荒くれ男をリフレッシュさせて砂漠に送り返す彼女たち。彼女たちの癒しが男たちの救い。

生まれ育ったイギリスを出てアテネ、アブダビと渡り歩き、ここバイルートに流れ着いたメアリーもその一人。私には、床に大の字にのびてしまったメアリーの無邪気な顔が、砂漠の天使のように見えた。

#### (4) カジノ・ド・リバン

バイルートから約20キロメートル北のマアメルタインというところに、カジノ・ド・リバンという中東一のカジノがあった。広さは1万坪超、賭博場の他にレストランや劇場、ナイトクラブなどが含まれていた。

バイルートに来てまもなく家族を連れて訪れた劇場では、氷上のアイススケートや本物の象が登場する大がかりなショーに驚愕した。

家族が来る前にバイルートに単身赴任をしている頃、日本では賭け事にはまったく縁のなかった私は、ここを訪れてささやかなお金でブラックジャックやルーレットを楽しんだ。

そこはいつも超満員。白い替え上着に蝶ネクタイをした産油国の金持ちが美女を引き連れて訪れ、使い走りらしい男たちに、「あそこに賭けろ」と顎で合図しながらルーレットを楽しむ様子を目を見張ったものだった。

ある晩、私は、ブラックジャックで儲けた。金額は12万円ほど（消費者物価指数からみると、現在では50万くらいか）だが、当時の私にしては大金だった。それを、お尻のズボンのポケットにねじ込んだ。「財布に入れなくて、大丈夫かな」とちらっと思ったが、産油国の金持ちのように鷹揚に構えようという気持ちがあった。「少し金が出来た。この金でルーレットにでも賭けてみるか」と人ごみの中で盤を覗き込んだ時だった。ズボンのポケットに誰かの手が入るのが分かった。すぐにポケットに手を当てたが、時すでに遅し。稼いだ金を全部盗られてしまった。一瞬の出来事で、悔しいカジノ・ド・リバンでの思い出となった。

この2年前の1973年には、私にとって人生初のカジノをイランのテヘラン郊外のアバリーで体験している。私が初めて中東を訪れた当時のことで、ニチメンの手塚支店長と連れ立ってよく出かけた。軍資金が乏しい私はつましく遊ぶ以外なかったが、サイコロがルーレットの「八」に連続して入り、そこに連続して大きく賭けて大儲けする者や稼いだ一枚一万円以上もするチップが上着やズボンのポケットに入り切らず、両手にも持っている二人連れのイラン人の姿に目を見張ったこともあった。

当時のテヘランはシャーの時代。現在のイランからは想像もできないであろうが、カジノもあり、ホテルでのバーはもちろん、イラン美人がサービスしてくれる飲み屋もあった。

ゴルフ場もあった。テヘランは標高1200メートルのところにあるから空気が薄い。ボールがよく飛んだ。それにキャディーの男の子が心得ていて、フェアウェイでボールを打つ時に、草の塊を積み上げて打ち易くしてくれた。真つ当なゴルファーにはにらみつけられる行為かもしれないが、私のようなヘボゴルファーにはありがたかった。

## 19-2 UDECO勤務時代 - 1977年から1979年

### (1) リーブ事件簿

当時のアブダビの石油会社の勤務形態は、土曜日から水曜日までが朝7時から午後2時まで、木曜日は12時までで、金曜日が休日であった。ラマダン（断食月）には、これが前後一時間ずつ削られて朝8時から午後1時までとなる。午後から翌朝まで自分の時間がたっぷりある。

サラリーマン生活の中で、これほど時間のある時期はなかった。本も読めるし、ゴルフ、マージャンなども存分に楽しめる。

それに、日本と異なるのは、夫婦が一緒にいる時間の長さ。日本の当時の『モーレツ（猛烈）』サラリーマン夫婦間の会話は、朝起きてから会社に出かけるまでと帰宅後の夜だけ。旦那のご帰還が夜中ということになると、奥方は寝てしまっているから、夫婦の会話はせいぜい一日10分足らず。それが、アブダビでは、帰宅してから翌朝7時まで、夫婦が一緒にいることになる。

夫婦一緒に時間がもっと長いのが、リーブ（休暇）である。期間は2ヶ月間。家族帯同者は家族でヨーロッパなどを旅行するのが一般的なパターンであり、この間1日中夫婦が一緒ということになる。

私たち一家にもアブダビ在住の2年間に2回のリーブがあり、イタリア、フランス、ドイツ、オーストリア、イギリス、スペインなどヨーロッパ各地を観光した。

1978年8月、妻や娘たちにとっては初めてのローマ。旅行中に知り合った日本人家族と私たちの家族が昼食のために、スペイン広場近くのイタリアン・レストランに立ち寄った時のことであった。

店はさして混んではいなかった。まずは前菜を取りに行こうと、みんな席を立ってしまった。荷物の監視役で席に残った私は、「そろそろみんなが帰ってくる。もう良かろう」と思って、前菜をとるために席を離れた。

前菜を入れた皿を持って席に戻ると、妻が椅子に掛けてあったハンドバッグが開けられていると騒いでいた。私が席を離れてから、すぐの出来事。バッグの中を調べた妻は、「エメラルドの指輪がない！」と言う。これは、私たち夫婦にとっては、値打ち物。「えっ！」と慌てた瞬間、「あら！今日は指にはめていたわ！」と妻が言って、一安心。

「何を盗られた？」と訊ねる私に、バッグの中を調べていた妻から、「財布もある。盗られたのは小銭入れだけ」との報告。小銭入れそのものはブランド品ではあったが、被害

は軽微。ほっと安堵の胸を撫で下ろした。隣に座っていたイタリア人の中年夫婦がいない。犯人は彼ら以外には考えられなかった。私たちのリーブは、このイタリア式の歓迎から始まった。

レストランを出てから、私たちはローマの市バスに乗った。そこそこ混んでいた車から降りる時に私のズボンの後ろポケットに手を入れられたのが、はっきりと分かった。「スリだ！何をする！」と思って見ると、上着を肩に掛けた粹な中年男がバスを降り、足早に遠ざかっていった。被害は無かったが、時を措かないイタリア人すりの襲撃であった。

翌1979年9月。家族でさんざんヨーロッパを回った後で娘たちを立教英国学院に送り届けてから、私と妻はアブダビへの帰途ローマに立ち寄り、2人だけの休暇を楽しんだ。そして、アブダビに帰るべく、レオナルド・ダ・ビンチ空港にタクシーで乗りつけ、スイス航空のカウンターに航空券を提示した時であった。受付嬢が「この飛行機はもう出発しました」と言う。「そんな馬鹿な！」と掲示板で確かめてみると、数日前からスケジュールが変わって飛行機はたしかに出てしまっていた。

私たちの航空券は格安チケットだから、その日に搭乗しないと無効になってしまう。「他にアブダビ行きの飛行機は？」と訊くと、「あるが、日本円で14万円ほど追加料金を払って下さい」と言う。ヨーロッパで遊んだ後で、そこまでのドルは持ち合わせていない。「アブダビのディルハムならあるが」と訊くと、ディルハム通貨は受け付けないと言う。

「どうしようか。そうだ、1人がアブダビに行く金はある。君、ローマに残ってくれる？僕がアブダビに帰って、すぐに金を送る」と妻に言ったら、「貴方って、相変わらず冷たい人ね。私1人でローマに残れ？よくもそんなことが言えるわね！」と文句を言われた。当然であった。

「仕方がない。今日のところは市内に戻って、善後策を考えよう」と荷物を引きずりながら、空港内をバスターミナルの方へ引き返した。見ると、日本人観光客の団体さんがいる。「幸せそう。こちとらは外国で文無し、惨めなもんだ」、「お金を貸してくれる人はいないかなあ」と、私は思った。

その前年のパリのシャルル・ド・ゴール空港。トランスファー・カウンターでドルやマルクの硬貨まで並べて、私たちの前の日本人紳士が「これだけの追加料金で日本に帰れる飛行機はありませんか」と必死に粘っていた。訊いてみると、「ドイツに留学中ですが、母が危篤で日本に帰るためにパリまで出てきましたが、お金が足りないのです」との話。そこで、私が、数千円不足のところを3万円用立てたことがあった。

後でその方から届いた礼状には、「お陰様で母の死に目に逢うことができました。お借りしたお金は指定の銀行口座に振り込ませていただきました」とあり、差出人は明治学院大学助教授小田島とあった。それが何の因果か、私たち夫婦がローマでオケラ状態に陥ってしまったのである。

空港へはタクシーで来たのに、帰りはバスで空港で予約した安宿へ。来る時の幸せ一杯の

気持ちとは真逆の落ち込んだ気持ちでの市内へのUターン、暗くなり始めている夕暮れ時で、いっそう気が滅入った。その夜の食事も、ホテル内の安メニューで我慢した。

翌日、「スイス航空に事情を話してみよう」と、事務所を訪ねた。応対してくれたのは、若い女性スタッフ。事情を聞いた彼女は、「ちょっとお待ち下さい」と言って、奥の上司に相談をしに行った。その成り行きを固唾を呑んで見守っていた私たちに、彼女から出た言葉は、「このチケットでアブダビまで一番早い便で帰れるようにします。貴方様が事前にリコンファームに来られた時に、スケジュール変更を通知しなかったこちらのミスです」というものであった。「地獄に仏」とは、まさにこのこと、その時の彼女の顔は「仏」に見えた。スイス航空さまさまであった。

後日、アブダビに帰着後に妻が旅行の荷物を整理したら、15万円ほどの日本円が入った封筒が出てきた。「ローマ空港で、この金に気づいていたら、それでアブダビに帰っていただろうから得したね」と妻と笑ったが、金が足りなかったあの時の心細さはいまも忘れられない。

ローマの前に訪れたパリでも忘れられない経験をした。それは、歓楽街として有名なピガールを訪れた時のことであった。しばらく表通りを案内した後、渋る妻をとあるいかがわしいショーをやっている店に引き込んだ。値段表には、一人10フランと書かれていた。

「安すぎる」と思いながらも、入口を入れてすぐの金属製の階段をトントンと上がった。上がったところのカーテンを開けて入ると中は薄暗く、眼下の舞台だけが照明で浮かび上がっていた。テーブルに座って見下ろすと、いかがわしい男女のショーのまっ最中。やがて、ボーイがわれわれのところシャンパンを運んできた。「頼んでいないよ」と言ったが、ボーイはシャンパンを置いて立ち去った。

「これはおかしい。シャンパン付きで10フランの訳がない」と気付いて、妻の手を引き階段を降りて店を出た。5、6メートル歩いたところで、店から追いかけてきた男に店の入り口に連れ戻された。すぐに、奥から黒尽くめの服装をした屈強な「ヤーさん」らしい男たち2人が出てきてこれに加わった。

男たちは「4万5千円支払え」と言う。「馬鹿言っちゃいけないよ。どこに4万5千円と書いてある？一人10フランとしか書いてないよ」と、私は落ち着いて反論した。ところである。男たちが「これを見ろ」と言う。なるほど、階段の途中の側壁に飲み物の値段がちゃんと書いてある。こちとらは入口を入れて、すぐの階段を登っているのだから、こんなものを知る訳がなかった。

私が妻に「払わなければ仕方ないか」と言ったら、英語もフランス語も片言の妻が突然フランスのヤーさんたちに食ってかかった。「これは詐欺だ！ムーラン・ルージュだって、こんなに高くない！警察に行こう！」とえらい剣幕でまくしたてた。「ポリース！ポリース！」と叫ぶ声で、通りを歩く人々も怪訝そうに立ち止まり始めた。慌てたのは、男たちの方であった。

「マダム、マダム」と妻をなだめにかかっている。「私には料金を支払え」と居丈高に脅

かしていたのに、妻には「マダム、まあそう言わずに」、「マダム、1万5千円だけ払って貰いませんか」と要求を下げた。懇願の様さえ見えた。こちらも、シャンパンに口をつけなかったが、ショーも垣間見たのだからと、これだけ払って一件落着した。

「女は強し」である。パリのヤーさんたちも、妻には下手にでていた。彼らも女性には弱いとみた。

最後の「事件」はタイのバンコクで起こった。アブダビでの2年間の勤務を終えた1979年10月に、私たちはタイに立ち寄ることとした。アブダビからあらかじめテレックスで、東南アジア石油バンコク事務所長の林に案内役を依頼した。林は丸善石油の後輩で当時同社に出向中であった。

2日目の夜、バンコク市内の日本食レストランで食事をした後に、林が案内してくれたのは、郊外のメンバー制のナイトクラブ。到着すると、林がわれわれを車中に待たせたまま、入口で何事かを交渉していた。

やがて戻ってきた林が「遠藤さん、パスポート持っていますか。パスポートがないと入れられないと言っています」と困惑顔で言う。そこで、私が「任せろ！」と言って出て行って、案内係の男に、「俺は三菱だ！パスポート要るか」と言うと、男は即座に「どうぞ、どうぞお入り下さい」と案内してくれた。

なるほど天下の三菱である。日本国のパスポートより効き目があった。

## (2) クラブ・エンドーズ

私と妻がアブダビでの生活を始めると、丸善石油関係者や友人たちから「遠藤さんは、お子さんたちはイギリスの学校だから、奥様との『新婚』生活ですね」と言われた。私はその度に、「とんでもない！ここでは、1日の大半が妻と一緒に、定年後の生活の練習だ！」と話していた。

アブダビでの生活は、「新婚生活」でも、「定年後の生活の練習」でもなかった。わが家には万来の客があったからである。

まずは、当時、アブダビの軍隊で空手を教えていた岩井達陸軍少佐。生活拠点がアブダビ陸軍のキャンプなので、食事はアラブ料理でアルコールは皆無。日本食党の岩井は「食べられない」というのだ。

彼はジャパン石油社員でもあったので、同社の寮や転職前の丸善石油の仲間がいるアブダビ石油の食堂、さらには商社員の家などでも食事をしていたが、ベースはわが家であった。わが家には、昼夜となくよく来た。時には、日本人の助手2人も連れてきた。

丸善石油と子会社のアブダビ駐在員も常連だった。私がバイルート内戦で、1976年に丸善石油の中東事務所をアブダビに移したことは既述した（第五回参照）。同年6月に東京本社に帰任した私の後任に菅野が着任していた。アブダビ石油の食堂に日本食を納入する事業のために子会社の丸善トレーディングからも中野が着任していた。菅野は単身、中野は独身での赴任。

二人から客を接待する時にわが家に場所の提供と妻に食事を作ってもらえないかとの依頼があった。私は、材料を持ち込むことと、わが家ではメイドを雇っていないので、接待後の食器洗いは2人が手伝うことという2つの条件で合意した。

二人は、食事だけに来ることもあった。妻の料理がおいしいのか、中野は食べ過ぎて動けなくなることがあった。そこで、腹をさすったり、立ち上がって壁によりかかり、食べ物が下に落ちていくのを待っていた。その滑稽な恰好はいまも記憶にある。

次の常連客は、駐在員仲間たちであった。丸善石油からアブダビ石油に出向中の後輩の吉田や揚戸、岩井陸軍少佐、当時アブダビ空港建設工事のために駐在していた竹中工務店の竹原と畦地、ジャパンラインの村尾夫妻、それに私たち夫婦がほぼ毎月飲食とカラオケを楽しんだ。妻帯者の家であるわが家と村尾家が交替でホストを務めた。

出張者の中にも常連がいた。1人はジャパン石油の斎藤専務。慶応大学在学中にフルブライト留学生としてアメリカの大学に学び、富士銀行から転籍して、海外担当の専務を務めていた。わが家がお気に入りの彼は、東京本社から出張してくると必ずわが家にやってきた。

もう一人が、丸善石油同期の森。当時、丸善トレーディングの部長をしていたが、同社のアブダビ支店長の休暇中に、代わりに1ヶ月間の滞在予定で日本からやってきた。ほぼ毎日、わが家で食事をした。森は、1959（昭和34）年に丸善石油が都市対抗野球で優勝した時の2塁手。身体も大きい。夕食に来たある時、二人で各々1キロのステーキを食べようということになった。スコッチフィレを、妻に焼いてもらって食べた。美味だったが、二人とも700グラムでギブアップした。これが、私の生涯記録となった。

常連客の中には、現地人もいた。アブダビ水電気省の次官のアル・ムサッベとその部下2名である。ムサッベはアブダビ石油会社に出向した丸善石油の先輩から紹介されて知り合ったのだが、妙にウマがあった。彼の事務所に行くと、大臣が不在の時には彼の隣の大臣室に入り込み、大臣席に座ってアブダビの大臣の気分を味わったものだった。また、彼のアブダビ市内の家や郊外にある別荘もよく訪れた。

彼は部下たちを連れてわが家によく来た。いま考えると、「狙いは、アルコールだった」ように思う。当時、外国人は収入に応じた購入枠を貰って、アルコール類を買うことができた。このため、わが家には飲み切れないほどのアルコール類が備えてあった。彼の名誉のために言うておくが、ムサッベ次官自身はアルコールは一滴も口にしなかった。同伴した2名が飲んだのである。

常連だけではなく、臨時の客も大勢あった。

岩田陸軍少佐は、空手7段。当時日本が中東に派遣していた「武道ミッション（剣道、柔道、空手、居合）」は、彼が財界から金を集めて組織した。夜9時ごろになって、「午前1時過ぎに日本から武道ミッションが到着します。差し入れ用におにぎりを50個握っていただけませんか」と突然わが家に飛び込んでくる。妻はたいへんである。それからご飯を炊いて、50個ものおにぎりを握るのである。こんなことが2回ほどあった。

アブダビではホテルでのパーティーがよく開かれた。それに参加した背広姿の私とドレ

ス姿の妻が帰宅すると、必ず10人を超える人々がわが家に入り込んでいた。岩井や吉田の他に見知らぬ顔がいくつもある。「〇〇の山田です。みなさんに付いてきました」とか、「X Xの伊東です。遠藤さんの家で会おうと言われてきました」とかの言い様だった。それから深夜までの飲み会になる。わが家は、アブダビでのたまり場、クラブ・エンドーズとなっていた。

1978年の夏。その経緯は記憶にないのだが、日本人、外国人を含めて80人近いパーティーをわが家で開いたことがあった。私が出向していたUDECO、アブダビ石油、商社駐在員や奥様たち、岩井と空手の先生たち、ムサッベと部下たち、娘たちと友達や隣人のカナダ人夫婦らが参加した。ジュースやビールなどのアルコール類がうず高く積み重ねられていたのを覚えている。

このクラブ・エンドーズを支えてくれたのが、妻の節子である。ひっきりなしに来る常連客たちの食事、パーティーに来る客の食事と飲み物、突然やってくる酔客たちへの酒とおつまみ、普通ではない数のおにぎりなどなど。しかも、同期の森にはこっぴどく叱られたのだが、わが家にはメイドがいなかった。暑い台所には、クーラーもなかった。そんな環境の中で、私は妻には途方もない世話をかけてしまった。彼女には、感謝してもしきれない。「彼女の寿命を縮めていなければよいのだが」と祈るばかりである。

アブダビ勤務時、私はプロ野球の花形選手並みの給料を貰っていたが、帰国してみると金はほとんど残っていなかった。大口は子供の教育費と休暇中の旅行費用だったろうが、飲食費も大口出費の一つだったことは間違いない。大勢の人へ飲食を提供し、楽しんでもらったのだから、持って瞑すべしだと思っている。

### 19-3 中央アジアへの旅 - 2000年

#### (1) アルマティへの旅

2000年8月22日、午前3時半に起床。5時前に家内と次女の智子、孫の6歳の悠太郎と2歳になったばかりの優花里とで車で成田空港に向かった。運転手は娘の智子。家内はOKなのだが、アブダビで「3勝3敗3引き分け（第六回参照）」の成績の私は、孫たちにまで、「ジージは、下手」と言われて車の運転をさせて貰えなかった。私はただただおとなしく助手席に座っていた。

成田からの行先は、カザフスタンのアルマティ。ソウルでの乗り換えとなる。この旅に出たのは、その年の4月から在カザフスタン日本大使館に単身赴任となった次女の夫の雅之を訪問する次女一家に同行するためだった。カザフスタンは中央アジアに位置するイスラームの国、かねて行ってみたいと思っていた国であった。

朝9時半に飛立った成田からソウルまでは快晴。大韓航空機機上からの富士山・日本アルプスなどの景色を楽しんで、飛行機は福井辺りで日本海に出た。韓国の上空には釜山の少し北から入り、あとは一路北上した。雲の合間に見える幾多の韓国の山並みを越えると、やが

でソウル。高層ビルが目立つ大都会だ。飛行機は定刻に到着した。

ここで、初めてのカザフスタン航空機に搭乗した。ソウルから中国経由でモンゴルとゴビ砂漠の上を飛ぶのは初めてである。ソウルからすぐに海上に出て、中国の上空へ入り、しばらく飛ぶとモンゴルの草原らしきものが見えてくる。これが、相撲界で活躍する旭鷲山や旭天鵬の故郷のモンゴルかと感慨もひとしおであった。

やがて、眼下に砂漠が広がった。ゴビ砂漠だ。初めて見る景色だ。砂漠といっても、砂が層になって広がっていて、湿った感じがある。アラビアの乾いた感じとは違うように見えた。私は食い入るように見つめた。

しばらく飛行した後、ひょっと左側の窓を見ると、白い雪を抱いた山並みが広がっている。いまはまだ夏の盛り。万年雪をいただくあの峰々は？ 崑崙山脈であろう。その高さは7,000メートル超。ヒマラヤほどの高さはないが、真っ白に輝く高い山を見て身がひきしまった。

砂漠と万年雪の山並みに見入っているうちに、眼下の砂漠が岩山に遮られている。飛行機はその山並みを越えてまもなく左に旋回した。下に緑の風景が広がる。どうやらアルマテらしい。見える山は天山山脈の支脈のクンガイ・アラ・トーカ。この山脈の最高峰はタンゲル山で、標高は4,793メートル。この高い山々からの水が流れ落ちる麓に広がるのが、アルマテ市。この地には昔からアルマテ川のほとりに同名の村があり、川の水源地の山手に野生のリンゴ(アルマ)が生えていたことに因んでこの名がついたという。アルマテというのは、「リンゴの里」という意味であるという。

もともとは遊牧民の一集落に過ぎなかったが、西シベリアから南下したロシア軍が1843年にこの地を占領し、ここに砦を築いてから発展したという。

われわれ一行は、夕方の6時過ぎに無事にアルマテに到着した。

## (2) アルマテ

空港からの道は覚えていないが、30分ほどして車はアパート然の建物の下の通路をくぐった。その建物が雅之の住まいだという。「えっ！ ここ？」と一瞬驚く。荒れた様相のアパート。むき出しのコンクリートの壁の建物の入り口には青いペンキのはげた板が、傾いて取り付けられている。階段に電気がついていたが、暗い。

雅之の住まいは5階にあるのだが、エレベーターがない。若い運転手の力も借りて、荷物を上に運び上げた。階段を4階まで上がって5階にかかる踊り場のところに鉄の扉がついている。これが防犯用の鍵付きの鉄の門扉。それから階段をさらに上がったところの家への入り口は2重の扉。外側の扉には鍵が3つ、内側の扉には1つの鍵がある。つまり家の出入りに5つの鍵の開け閉めが必要であった。「中東では考えられない、治安の悪い所に来た」という緊張感が走った。

しかし、一步部屋の中に入ると、そこは煌煌と電気が灯り、広い応接間、きらびやかな家具、鮮やかな絵柄の絨毯などが目に飛び込んできた。外観からは想像出来ない立派さだった。

玄関左手の台所、3つある2階のベッド・ルームも十分な広さがあり、ほっとした。一見立派に見えたが、滞在中に2階に通じる階段や床が平らではないこと、シャワーも水とお湯が均一には出ないこと、家具類がちやちなことなどが分かり、「旧ソ連圏らしいね」という評価に変わった。

窓から外を見ると、構内の真向かいにはアパート群。中の通路を縁取るのは背の高いプラタナスの木。その先に垣間見えるのは、左に行くと日本大使館のある広い通り。ここにはアルマティ名物のトロリーバス（架線のあるバス）やアフトバス（普通のバス）、それに乗用車が頻繁に通っていた。それに、なぜかサイレンを鳴らしたパトカーがよく走っていた。道路の両側を縁取る街路樹、背の高いプラタナスの葉が風に揺れている。なんとなく、テヘランや北京に似ている感じがした。

目を上げると、そこには天山山脈支脈のクンガイ・アラ・トーの山容。広い山の斜面には、「ダーチャ」と呼ばれる別荘が麓まで点在する。奥にはクンガイ最高峰の万年雪をいただくタンゲル山。視点を右に移しても、窓いっぱいにはクンガイの山並みが広がっていた。

「町へ出る時には、必ずパスポートを携帯すること」、「金はたくさん持ち歩かないように。泥棒に狙われるから、お金を他人に見せないように」、「バザールや百貨店ではスリに気を付けるように」との注意を雅之から受ける。治安が悪いのだ。

アルマティの町では、28人のパンフィロフ戦士公園、カザフ民族楽器博物館、ゼンコフロシア正教会、考古学博物館、国立中央博物館、コクトベ（緑の丘）、中央バザール、百貨店ツム、日本人墓地など見るべき場所はほとんど見てまわった。ホテルもリージェント・アルマティ、ラハット・ハウス、ホテル・カザフスタンなどに立ち寄ったが、すべて雅之のお抱え運転手のアナトリに運転を頼んでのことであった。

滞在中には、韓国料理店、中華料理店、イギリス式のパブやレストランも訪ねたが、印象的だったのは、郊外のユルタ（遊牧民のフェルト製のテント）で食べるカザフスタン料理店。出たのは、ショルポ（スープ）、ラグマン（やきそば）、マンティ（肉饅頭）、シャシリク（肉の串焼き料理）。とくに、シャシリクは肉の大きさが適度で、味もとてもよかった。

家に出前でとったものとは、大違い。みんな「美味しい。これは美味しい」と一回目に頼んだシャシリクの皿はたちまちにして空になり、追加を頼んだ。やはりカザフスタンでは、シャシリクが一番だと思った。飲み物は、ビールやワイン、それにジュース類。ユルタの中に敷いてある絨毯と壁にあるフェルトの絨毯の絵柄が美しく、われわれはユルタの雰囲気をも十分に味わえて大満足。

ユルタの外に出ると、庭の斜面にリンゴがたくさんなっていた。われわれは、食事を楽しんだ上にリンゴ狩りまで楽しんだ。

市街の中心から約15分ほどの日本人墓地も訪ねた。1945年8月9日、あらかじめ日本の敗戦を予測したソ連は中立条約を破って満州に侵入した。その結果、60万有余の日本人がシベリアに抑留されて苛酷な賦役を科せられ、6万人もがシベリアの土となった。このことはどうしても私の脳裏から消し去ることが出来ず、私の反ロシアの原点になっている。

墓地はドイツ人抑留者墓地に隣接していたが、一帯にはカザフ人やロシア人の墓地も点在していた。因みに、アナトリの母の墓もすぐ近くにあるとのことであった。日本人墓地は階段を5、6段かけ上がったところに広がっていた。

正面には、「鎮魂」の文字の書いた石碑。三方を深い緑の木々に囲まれた敷地内の1区画ずつの中に矩形の石の墓が置かれている。亡くなられた方の名前はない。約5万6千人の日本兵がカザフスタンに抑留され、1,394人が命を落とし、この地に眠っているという。

私は、その碑と左右の墓に向って両手を合わせた。なにも知らない6歳の悠太郎と2歳の優花里も真似して傍らで手を合わせくれた。雅之によると、カザフスタン在住の日本人がこの墓地の清掃を行っているとか。また、空港近くにも日本人墓地があると聞いた。

新聞紙上のシベリアの日本人墓地墓参の記事を毎年やりきれない気持ちで見してきた私には、訪問せずにはいられない場所であった。

### (3) キルギスへの旅

一週間ほど後の8月30日の昼下がり、私はキルギスにあるバラサグン遺跡内に立つブラナの塔上にいた。バラサグンは、10世紀から12世紀にかけて栄えたカラハーン王朝の首都遺跡の1つである。カラハーン王朝とはイスラーム教に改宗した最初期のトルコ系王朝である。

もともとは高さが45メートルあった塔は15・16世紀の地震で上の部分が崩壊し、いまは24メートルしかない。それでも、塔に登らずに真下の広場から見上げる妻の姿が豆粒ほどにしか見えないほどの高さであった。

私と妻は、カザフスタンから念願であったキルギスのイシュク・クル湖まで足を伸ばすことにし、その途次にキルギスの首都ビシュケクから東60キロの距離にあるこの遺跡に立ち寄ったのだった。

塔上には、夏の太陽が燦燦と降り注いでいた。真っ暗闇の塔内を手探りで登ってきた私には、その光はとりわけまぶしかった。広い草原にポツンと立つブラナの塔上で開放感一杯に背伸びをする私の身体をキルギスの風が心地よく吹き抜けた。360度見渡すと、北にはザイリスキー・アラタウ山脈の山々が間近に迫り、南西方向には遠くキルギスキー・アラタウ山脈が見える。南には4,000-6,000メートル級の天山山脈の山々、夏だというのにどの山の頂も白い雪に覆われ、燦燦たる日差しを浴びてまぶしく光っていた。

眼下には、見渡す限り緑の田園風景が広がっていた。田畑の中を縦横に走る道路沿いに植えられたポプラ並木の葉が、日差しの中で風に揺れながら裏返り、白くひらめいている。「これが、シルクロードか」と私は何千年もの悠久の歴史を思いながら、塔上に立ち尽くした。

玄奘三蔵が突厥の王に歓待を受けた碎葉城があったアク・ベシムの遺跡もここから北西に6キロ、すぐ近くにある。因みに、碎葉(スイアーブ)は唐の詩人李白が生まれたところともされている。玄奘もいま私の眼下に広がるこの地を通った筈である。馬の背に揺られながら、のどかな風景に心を和ませたに違いない。

627年(629年という説もある)に長安を出発した後、2年近くに及ぶ玄奘のインドへの求法の旅が多く危険と想像を絶する困難なものであったことから、西遊記に記されたシルクロードは妖怪とともに茫漠たる砂漠や異様な火焰山、厳冬の天山山脈のイメージが強いのだが、こんなにのどかな田園風景もあったのかと驚かされた。

そこから約120キロほど東にあるイシュク・クル湖は、「中央アジアの真珠」と呼ばれ、天山山脈の奥深くに横たわる。東西182キロメートル、南北60キロメートルで大きさは琵琶湖の9倍、標高1,600メートルのところにある。玄奘三蔵もここを訪れているが、1880(明治13)年から1881年にかけて日本人として初めて中央アジアに入った西徳二郎がこの近くを訪れ、その著「中亜細亜紀事」の中で、「熱い海(冬も凍らない)」として紹介している。ソ連時代には、軍事施設があったために外国人の立ち入りが禁止され、作家の井上靖が訪問の夢が叶わずに大変に残念だったという。

私と妻は、イシュク・クル湖畔のチョルポンアタのアベローナ・ホテルに投宿した。実は、この旅の前にひと悶着あった。雅之が、カザフスタンで英語のできるガイド付きの車を手配してくれていたが、独り旅に自信のある私はガイドを断り、カザフスタンからのタクシーでキルギスに入り、ビシュケクのホテルで昼食を済ませ、ここまでやって来たのだった。

アベローナ・ホテルは、ソビエト連邦時代のサナトリウム。私たちが到着した時にホテルで英語を話せるたった一人の女性がたまたま不在で、チェックインに時間がかかった。6階の部屋に行くエレベーターが年代もので、各階に止まるごとに「ガタン！」と大きな音を立て、落下するのではないかと怖い思いをした。

ガイドを手配しなかったことを後悔したのは、夕食の時であった。英語のメニューがなかったのだ。リビアへの入国カードの記入がアラビア語のみで困り、アラビア語のできる人に記入してもらったことは既述した(第四回参照)が、今度ばかりはお手上げであった。メニューがまったく読めないのだから、注文の仕様がな。英語を話す人もいない。どうしようもなく、近くの席の人の食べているものを「あれ！」と指さして注文をして夕食を終えた。その食べ物は刻んだ青ネギで一面覆われていた。やはり、雅之のアレンジの通りにガイドを頼んだ方がよかったと思ったが、後の祭りであった。

ホテルの建物から海岸までは、百メートルほどの林が続いていた。翌朝、そこを通り抜けて私と妻はイシュク・クル湖の湖岸を散歩し、湖に入って泳いだ。真夏というのに水は冷たかった。北にはザイリスキー・アラタウ山脈、遠く南西にはキルギスキー・アラタウ山脈、南東にはさらに遠くに天山山脈の山々を見ながら、広大な湖に身を沈めることができたのは、感慨深いものがあった。

帰途は、近くの岩絵野外博物館に立ち寄った。紀元前11世紀から紀元初期に中央アジアにいたイラン系の遊牧民であるサカ族によって描かれた、このような絵は、初体験であった。また、小高い丘からのイシュク・クル湖の眺めは素晴らしかった。

その後、アルマテイに戻り、9月4日の夜の飛行機で発ち、5日午前成田に着いた。私には貴重な中央アジアへの旅であった。

#### 19-4 アラビア半島内の争い

私が中東に関わるようになってから、アラビア湾岸や周辺では多くの争いが起こった。第4次中東戦争、バイルート内戦、イラン・イラク戦争、湾岸戦争やイラク戦争については既述した。

イラク及びシリアの一定の領域を支配し、2014年6月にカリフ制の樹立を宣言し、アブー・バクル・バグダディーがカリフを名乗った「イスラーム国（IS）」の誕生もあった。さらに、アラブの春以降10年以上に亘って続いたシリア内戦（2024年12月8日に終結）や2024年10月7日のハマスの奇襲によって始まったガザ・イスラエル戦争（2025年1月19日に一時停戦）もあった。

ここでは、アラビア半島内の争いについて述べる。

##### (1) イエメン内戦

アラビア半島にある国で私が唯一訪れていないのが、イエメンである。隣国のオマーンに4年間も住み、2006年の乳香についてのテレビ番組の取材時にはオマーン・イエメン国境まで行きながら、この国を訪れることはなかった。

イエメンの歴史は古い。史上初めてアラビア半島に現れた国は紀元前800年ごろに成立したとされるサバア王国で、農耕の発達やインド産香料の中継貿易によって大いに繁栄した。シバの女王は、この国の女王とする説が有力である。

サバア王国は275年にヒムラヤ王国に滅ぼされ、ヒムラヤ王国は525年にエチオピア勢力によって滅亡、575年にササン朝ペルシャがこれを破りこの地を支配した。

628年のササン朝ペルシャの総督のイスラームへの改宗で、イエメンはイスラーム化した。その後いくつかの王朝が栄枯盛衰をくり返し、16世紀にオスマン帝国の支配下に入るが、17世紀にはシーア派の一派であるザイド派が支配した。しかし、19世紀初頭にはエジプトの勢力下におかれた。

1839年に英国がアデンを中心とする南イエメンを占領してこれを保護領とし、1849年にはオスマン帝国が北イエメンを再占領して、南北が分裂した。1918年のオスマン帝国の第一次世界大戦敗北にともない、北イエメン地域にザイド派によるイエメン王国が誕生した。

1962年に軍事クーデターによりイエメン王国が崩壊し、イエメン・アラブ共和国が成立。1967年に英領南アラビア保護領が、ソ連寄りの共産政権による南イエメン人民共和国として独立し、後にイエメン人民民主共和国に改称した。1990年にイエメン・アラブ共和国（北イエメン）とイエメン人民民主共和国（南イエメン）が合併し、現在のイエメン共和国が成立、北イエメン大統領を務めていたアリー・アブドラー・サレハが初代大統領に就任した。

しかし、1994年には南イエメンが再独立を唱えて内戦が勃発し、同年中に北イエメンが勝利して停戦が成立した。1999年には国民の直接投票による大統領選挙が行われ、サレハ大統領が再選された。

アラブの春の影響で、2011年1月にイエメンでも学生や市民による反政府デモが始まった。治安部隊と市民の衝突やアルカーイダ系のテロ組織も動き出し、イエメンは三つ巴の騒乱状態となった。同年11月に、サレハが33年間維持してきた政権を副大統領のハディに委譲し、翌年の総選挙でハディが正式な大統領に選出された。

2014年2月に、国内の反政府勢力すべてを招いた場で、「新たに起草される憲法の下でイエメンを6つの地域に分けた連邦国家とする」ことが合意された。

しかしながら、同年夏には、生活への国民の不満を背景に、サアダに本拠を持つ反政府組織フーシ派が北部部族を巻きこんで勢力を拡大しながら南下し、9月にはハディ政権軍の抵抗を受けることなくサヌアに入城した。

ハディ政権は、フーシ派と「パートナー合意」を結ぶことでサヌアを共同統治する形にした。同年末までには憲法草案が完成したが、6地域の境界線に不満があるフーシ派は、2015年1月に大統領府長官を誘拐・監禁、ハディ大統領を自宅軟禁した。

辞任を余儀なくされたハディは、その後サヌアからアデンに脱出し辞意を撤回。この結果、2月にはアデンのハディ政権とサヌアのフーシ派政権という二重構造が発生した。

ハディ政権はサウジに助けを求めた。サウジとしても、イランの影がのぞくフーシ派のイエメンの首都占拠を座視できず、イスラーム教スンニ派の国々からなる有志連合軍を形成した。3月には、フーシ派からのサヌア奪還を目指して空爆を開始し、イエメン全土が内戦状態に突入した。

その後フーシ派がアデンに侵攻し、ハディはサウジアラビアに避難。このフーシ派の侵攻を阻止すべくUAEが派兵、サヌア周辺の空爆はサウジ軍、アデン周辺の治安維持はUAE軍というすみ分けができ上がった。

自国の若者たちがイエメンで命を落とすことに国内で不満の声が上がったUAEは2019年7月から徐々に撤退を開始し、この空白を埋めるようにハディ政権から分離した南部暫定評議会が勢力を伸ばして、8月にはアデンの中心部を掌握するに至った。南部暫定評議会と「正統政権」であるハディ政権との対立はフーシ派を利するのみなので、サウジアラビアが両者を調停し、11月に両者間で停戦・権力分割が合意された（リヤド合意）。

バイデン米大統領は、2021年1月の就任直後の2月には、イエメン内戦の終結を目指す決意を示し、サウジアラビアへの武器の売却を停止する一方、フーシ派に対する「テロ組織」指定を解除した。米軍の有志連合軍への軍事活動支援も打ち切った。

2022年1月にイエメン南部の独立を目指したフーシ派が、対立するUAEに対して、イエメン内戦に介入しないようにUAE籍の船舶を拿捕、ついでアブダビの石油施設に対してドローンとミサイルで攻撃、3月にはサウジアラビアの石油施設も攻撃した。26日に

は反乱軍が3日間の停戦を宣言。29日にはサウジアラビアが主導する連合軍が独自に停戦を発表。その後、国連の仲介により紛争当事者が全面的な停戦に合意し、ラマダンが始まった4月2日から発効した。

4月7日に避難先のリヤドから、ハディ大統領は8名（議長及び副議長7名）からなる大統領指導評議会への国家運営を行う権限、さらには親イラン組織フーシ派と交渉する権限の委譲を発表した。

4月発効の停戦は6月と8月にそれぞれ2ヶ月延長され維持されてきた。10月に入って停戦合意は無効となったが、両サイドは事態がエスカレートしないよう抑制した状態が続いた。2023年3月に中国の仲介で、サウジアラビアとイランが2ヶ月以内に、国交を正常化させることで合意した。これを受けて、4月にはサウジアラビア政府とイエメンの反政府勢力の代表が直接第一回目の会談を行った。

その後、2023年10月7日にガザ地区を実効支配していたハマスがイスラエル領内への奇襲攻撃を仕掛け、外国人を含め1,139人を殺害し、240人以上と見られる人質を拉致、ガザ・イスラエル戦争が勃発した際に、ハマスと同様にイランの支援を受けているイエメンの反政府組織のフーシ派は、ハマスとの共闘をめざして紅海上でイスラエルに関係のある商船へのミサイル攻撃などを行った。同年11月19日には、日本郵船が運航する貨物船がフーシ派によって拿捕された。

その後もフーシ派は商船攻撃を繰り返し、米国が所有・運航するコンテナ船までも攻撃し、米英がフーシ派の拠点を繰り返し空爆する事態も招いている。さらに、2024年7月23日には、フーシ派はテルアビブを攻撃し、同年9月29日には、イスラエルがイエメンの港湾都市ホデイダなどの発電所や港を標的に空爆をするなど、イスラエルとも戦火を交えることとなった。

2025年1月20日に2期目の大統領に就任したトランプは、同月22日、イエメンの反政府武装組織フーシ派を「外国テロ組織」に再指定する大統領令に署名した。これは、バイデン前政権の決定を覆したもので、「フーシ派の継戦能力と活動を根絶し、紅海での海上輸送や米兵、友好国への攻撃を終わらせる」と主張し、3月15日には米空軍がイエメンの首都サヌアを空爆した。

2022年の国連の報告書が「世界最悪の人道危機の一つ」と位置づけ、死者が約37万7千人にのぼり、400万以上の人々が避難を余儀なくされたとされるイエメン内戦はフーシ派がイスラエルに攻撃したこととも相まって、収束の行方はいまのところまったく見えない。

## （2）カタールとの断交

サウジアラビア、UAE、バーレーン、エジプトの4ヶ国（通称、カルテット）は、2017年6月5日に突如カタールと断交した。UAEは、同日同国に滞在するカタール人に14日以内の退去を求め、翌6日には、自国のエミレーツ航空とイティハド航空のカタール便

の運航を停止した。また、カルテットは同日、カタールのナショナルフラッグ・キャリアであるカタール航空の領空通過を禁止した。

まったく唐突に見えた断交であったが、そこに至るまでにはいろいろな伏線があった。カタール支配者の出自への違和感、1986年にバーレーンとカタール間の小島の領有権を巡る武力紛争時に仲介したサウジアラビアのバハレーン寄りの態度へのカタールの不満、カタールの先々代のハリーファ首長や先代のハマド首長による各先代首長放逐による政権奪取への違和感、カタールの突出した一人当たりのGDPや独自外交路線への思いなどなどであった。

カタールの独自外交路線、具体的には、アルジャジーラ問題、ムスリム同胞団、イランへの対応に4ヶ国は不満を募らせていた。

カタールが1996年に設立した国際衛星テレビ局アルジャジーラは、アラブ諸国から「過激派を擁護し、暴力を煽っている」として、その閉鎖を迫られていたが、カタールはこれを無視してきていた。

2011年の「アラブの春」以降、カタールはエジプトのムスリム同胞団を基盤とするモルシ政権に肩入れをした。2013年にモルシに代わって政権を握ったシーシ大統領がムスリム同胞団を「テロ組織」とみなすとサウジアラビアやUAEはこれに同調したが、カタールは逃げてきた同胞団メンバーを受け入れてその活動を許容していた。2014年に、カタールはリヤド合意で同胞団との絶縁をサウジアラビアなどに約束したが、その合意も守っていなかった。

サウジアラビアはテロ関連でイスラーム教シーア派の指導者の死刑を執行し、それに抗議するデモ隊が駐イラン・サウジアラビア大使館を襲撃したことから、2016年1月3日にイランと断交して対立を強めたが、イランとガス田を共有するカタールはイランに融和的で、この姿勢も不満の種であった。

2017年5月のトランプ米大統領のサウジアラビア訪問も断交への伏線の一つとなった。トランプ大統領は、アラブ諸国の首脳らを集め「共通の脅威はイランとテロ組織」であることを強調した。サウジアラビアとUAEはこれに同調してカタール非難をトランプに訴え、ムスリム同胞団を抱えるエジプトもこれに乗った。

そして、5月24日カタール国营通信のサイトに載ったタミーム首長の発言が親イラン的でテロ組織を肯定するとして、サウジアラビアやUAEのメディアがカタール政府を一斉に非難した。カタールは「外部からのハッキングによって掲載された偽情報」と発表した。サウジアラビアやUAEのメディアはカタールへの非難を続けた。

6月3日には、駐米UAE大使のメールがリークされ、UAEがこれまで裏でカタールに対するネガティブキャンペーンを行ってきたことが暴露された。このような双方による応酬が、6月5日の断交につながったのである。

カタールにとっては、断交は青天の霹靂であった。

断交時には、90%を輸入に頼っていた食料や2022年のW杯サッカー場関連の建設

資材の輸入などが懸念された。断交直後にはカタールのスーパーでは食料の買い占めも起こったが、トルコやイランが空路での食糧支援を実施した。カタール航空はカルテットの上空を飛べなくなったが、飛行ルートの変更によってこれを凌いだ。断交によって退去を命じられたカタール人をサウジアラビアのジェッダなどからカタールの首都ドーハへの移送にはオマーンが当たり、UAEのジュベルアリ港で扱えなくなったカタール向けの貨物はオマーンのソハール港で取り扱った。

カタールは断交後ただちにクウェートに支援を求めた。クウェート首長のサバーハ4世はカタールのタミーム首長に自制を求めるとともに、カルテット側と問題解決のための協議を始め、オマーンも仲介に向けて動いた。トルコのエルドアン大統領はこの国交断絶を批判し、トルコ政府はカタールへの食糧支援と軍隊の派遣を決定した。

米国も仲介に乗り出した。しかし、6月22日にカルテットはイランとの外交関係の抑制、ムスリム同胞団、イスラーム国、アルカーイダ、ヒズボラなどのテロ組織との関係断絶、カタールの衛星テレビ局アルジャジーラとその提携局の閉鎖、カタールにおけるトルコ軍の撤退または同国との軍事関係の解消、カルテットの国民へのカタール国籍付与の中止、カルテットへの政治干渉の禁止などの13項目の要求を突きつけた。7月にカタールはこれを拒否し、対立は激化した。

カタールは、さらに8月にかけてカルテットの経済制裁を違法としてWTO（世界貿易機関）に提訴し、物資の輸入先をオマーン、インド、イラン、トルコに切り替え、欧米から戦闘機などを輸入するとともに、トルコ軍と合同軍事練習を実施した。12月の建国記念の軍事パレードには中国製弾道ミサイルを披露するなど中国への接近も目立たせた。

2018年に入るとカルテットによる対カタール断交が常態化し、クウェートや米国の仲介にも関わらず、2019年9月まで事態は膠着した。

この間もクウェートと米国による仲介は行われた。クウェートは当事国に外交特使を派遣し、またサバーハ4世もあらゆる機会に湾岸地域における対立の解消を求める演説を行った。同盟国であるGCC諸国同士の不和は、対イラン包囲網構築への障害になるとして、トランプ大統領は当事国に断交終結を強く要求したが、カルテットはこれに応じなかった。

2019年10月になって、カタールの副首相兼外相が秘密裏にリヤドを訪れ、サウジアラビア政府高官との会談が行われるという動きが出た。また、11月下旬から12月初旬にカタールのドーハで開催されたサッカー大会「ガルフカップ」にはサウジアラビア、UAE、バハレーンが参加した。

この頃からカタール断交が解決するのではないかという楽観的な観測が出始めた。2020年1月にはサウジアラビアとカタールの直接的接触があり、5月にはクウェートおよびオマーンの外交関係者の往来や首脳級のコミュニケーションが活発化したが、解決にまでは至らなかった。対話の兆しが見え始めたなかでも、カタールとカルテットの対立は依然として続いた。

2020年9月にジャレッド・クシュナー米大統領上級顧問がカタールを訪問し、11月

末からリヤドとドーハを訪問し、ムハンマド皇太子とタミーム首長と相次いで会談した。そして、12月4日にクウェート外相が声明を発表し、当事国の間で最終合意に達するための実りある議論が行われたとして、クシュナーによる仲介を称賛した

そして、第41回GCC首脳会議開催の前日にあたる2021年1月4日、サウジアラビアとカタールが国境および領空の封鎖の解除に合意したことを発表した。翌日には、サウジアラビアのウラーに首脳級が集まり、GCC諸国の協調と統合の達成をうたった「ウラー宣言」に署名がなされ、エジプトもこれに署名した。これにより、対カタール断交は終結した。